

市民と市政をつなぐ情報紙

Kuki

広報くき

8

2023 (令和5年)
No.269

ジモトでジモノを。





久喜市の農業

私たちの暮らしているすぐそばには、さまざまな農産物が育つ畑が広がっています。

市では、農業に関する取り組みとして、令和5年2月に、イオンアグリ創造株式会社と「食と農の包括連携協定」を締結し、協働で地域農業の活性化と地域の魅力向上を図っています。また、小面積の農地を利用し、野菜や花を育てることができると「しみん農園」を各地区に設けています。

新規就農へのハードル

自然を相手にする農業。皆さんの農業へのイメージは、どのようなものでしょうか。

「自由で楽しそう」「自然と戯れて生活してみたい」その一方で、「収入が安定するまで大変そう」「長時間の屋外労働で、体を壊しそう」と、マイナス面を考慮してしまうという方もいるかもしれません。

全国的にも課題となっている、農業者の高齢化や慢性的な担い手不足。「令和4年度食料・農業・農村白書(農林水産省)」によると、新規に就農した方が、就農時に課題として挙げていることは、主に農地・資金の確保や、営農技術の習得。また、就農しても、経営不

振などの理由から定着できないというケースもあります。

地産地消で

久喜市の農業を応援する

実際に、新規に就農された方はどのような感じているのでしょうか。今回は、市内で新規就農された3人の農業者を集め、日々畑で奮闘する姿を追いました。

そして、私たちの周りには、丹精込めて農産物を作っている生産者がいて、市内の「食」を支えています。そして、生産者もまた、私たち消費者に支えられているのです。「地元」で採れた、新鮮で安全な「地物」農産物。日々の生活でも、少し意識して選んでみてはいかがでしょうか。



▲夏に旬を迎える野菜はたくさんあります。

久喜市の一人の農業者として 農業で久喜市を盛り上げたい

萩原さんは、実家は非農家ですが、大学の就職活動の時に農業をやるうと決意したと言います。

「祖父の畑が、家庭菜園にしては珍しく、キウイやブドウなども育てる広い畑でした。小さい頃から親しんでいた畑も、今はアパートに変わってしまい、実家近くには辞めてしまった梨農家もあります。そんな現状を目の当たりにした時、やっぱり農業は高齢化しているし、若い人がいない。それなら自分が農業をやってみようかなって。」

大学卒業後に、農業関連会社に就職。その後、1年間農業大学校に通い、2年間の市内での研修を経て、昨年7月に独立した萩原さん。天候に左右され、収穫量が芳しくないこともありすが、こつこつ地道にやるのが好きな性格も相まって、今は農業が楽しいと笑顔が弾けます。

「たくさん収穫できた時は、きちんと育てられたという達成感がありますし、その日出荷した分が全部売れたとか、やった分だけ成果として出てくるのは、農業の魅力なのかなと思います。」

萩原さんは、地元で採れた農産



はぎわら なおと
萩原直人さん(30)

現在独立してちょうど1年ほど。苧蒲町新堀の畑で主にキュウリ、ナス、ピーマンを育てている。休日には奥様にも収穫を手伝ってもらいながら、日々農業を続けている。

物を、もっと多くの市民に食べてほしいと話します。

「久喜市の一人の農家として、市が少しでも農業で盛んになるよう頑張りたいです。キュウリは、曲がっていても味は何にも変わりません。特にかっぱ巻きを作るわけじゃないければ(笑)曲がったキュウリも、手に取ってみてくださいね。」

最近「栽培方法を数値化し、作業や収穫を分かりやすくすること」に取り組んでいると話す萩原さん。「安定的に収量が取れるような、数値化したマニュアルを作って『農

業は稼げる』と証明したいです。目指せ売上1000万円！」笑顔で語る萩原さんの目は、希望に満ちていました。



▲ここから5日ほどで食べ頃に。

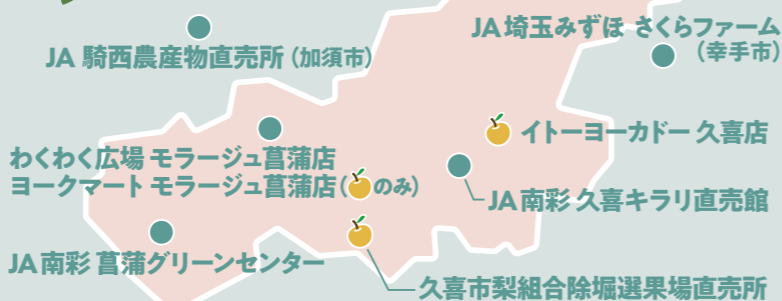
萩原さんの農産物の販売場所

- ・苧蒲グリーンセンター
- ・モラージュ苧蒲2階 わくわく広場

他にも、個人経営・販売の農家を「久喜市農産物直売所ガイドマップ」に掲載しています。市ホームページでもご覧いただけます。



新鮮な農産物や植物が買える / 直売所はこちら



※ のみ の場所は、梨のみを販売

ジモトでジモノを。

農業者の高齢化や慢性的な担い手不足が課題となる中、市内で新規に就農された3人の農業者がいます。「地元」で頑張っている生産者の姿を通して、農業について改めて考えるとともに、久喜市で採れた「地物」の農産物を手に取ってみませんか。



8月は梨の季節

内田 拓磁さん (35)

実家は杉戸町。菖蒲町新堀にある、後継者のいなかった梨園を引き継ぎ新規就農。持病と闘いながら、失敗を恐れず農業に取り組む。

てんかんの人たちにも働ける場を作りたい

新梢管理という作業。高いところに養分が行く習性を活かし、実がなっている枝の先端を立てて、養分を行きやすくしている。



駒崎さんの畑では、9~10月頃にサツマイモと落花生が旬を迎える。

約30年間、コンピューター関連の仕事をしてきた駒崎さんは、この4月から農業の世界に飛び込みました。そのきっかけは、奥様の一言だったと言います。

「4、5年前に『50歳になったら、夫婦で何か仕事ができたらいいね』って漠然と話をしていました。そこで妻が『農業をやってみよう』と言ったのがきっかけです。それまで全然関係ない仕事だったし、農業は全然思ってもいないことでした。」

「作る側に回ってみたい。一番驚いたのが農薬の量。諸外国と比べても、日本は多く農薬を使っているんです。出来る限り農薬を使わずに、環境に優しい農産物を作りたいと思っています。」と駒崎さんは話します。

農地の近所の方に、たくさん助けてもらっているという駒崎さん。「いつも色々教えていただいで、本当に感謝しています。今まで普通の会社員で、仕事関係の方とは関わりがありませんが、農業でこうして近所の人や地元の人と繋がることができる。これがいわゆるコミュニティなんだと実感しました」と語ります。

駒崎さんの農産物の販売場所

- ・JA騎西農産物直売所 (加須市騎西425)
- ・モラージュ菖蒲2階 わくわく広場

今後、軌道に乗れば、ゆくゆくは農地を広げ、空き家を活用して農地キャンプ場を作ってみたいと、目を輝かせます。

「まだまだ正直、不安な部分も多いですが、会社員の頃よりも歯車感がないというか、自分で全部決めて好きなようにできるので、こんなに自由にやっていると、楽しんで農業をしています。」

農業を始めてから、大きく変わったことがあると言う駒崎さん。「農業を始めてから、体重が15kgも減ったんです。農業はダイエットにも効果があるのかもしれないよ(笑)」と、笑顔で話してくれました。

サラリーマンから農家に転身。「特別栽培農産物」を多くの人に届けたい



駒崎 昌弘さん (55)

4月から、北中曽根にある農地で研修中。指導農家の指導のもと、10種類ほどの農産物を育てる。奥様からの「楽しんでわくわくしながらやりなさいね」という言葉を常に意識して農業に励んでいる。

3年前に、高校時代の先輩から声をかけられ、後継者のいなかったこの梨園を紹介されたと言う内田さん。学生時代は、農業高校、農業大学校と、農業について学び、ずっと果樹を専攻していたと言います。

「農業大学校の時の実習先が、久喜の園芸試験場だったんです。そこで専門性を磨きました。卒業後は、農業生産法人や、観光農園で働いていましたが、その時に、先輩から声をかけてもらって。」

「高校時代から梨に携わっていて、食べるのも梨が一番好き。自分でやりたいと思っていた梨に携わることができて良かったんです。」

そう話す内田さんは、自分で作った梨がお客さんの手に渡り、「良かった、おもしろかった」と言われた時に、一番やりがいを感じる、と顔をほころばせます。

運転免許も持っていない時期がありました。そういう、てんかんの人たちにも、働ける場を与えてあげたいという気持ちがあった、今模索しているところです。てんかんについては、色々研究も進められているみたいなので、何か取り入れられるものはないか、自分でも情報を集めています。」と熱意を込めて語りました。

内田さんの農産物の販売場所

- ・庭先販売 (菖蒲町新堀2376)
- ・ネット販売 (「宮野梨園 久喜市」で検索)
- ・ふるさと納税

◀梨は、取材した6月下旬だとまだ小ぶり。1カ月も経たないうちに倍ほどのサイズになるそうです。

就農に関するご相談等は

農業振興課農業振興係
☎85-1111(内線337)へ

主な品種と出荷時期

	8月			9月			10月	
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬
幸水 酸味は少なく、甘みが強い。市の梨出荷の約半数を占める。	■							
彩玉 甘みが強く、果肉はみずみずしい。県育成の新品種で平均550gの大玉。			■					
豊水 ほどよい酸味と甘みとのバランスがよく、味は濃厚。			■					
あきづき 甘みが強く、柔らかな歯ざわり。秋の月のように丸く、美しい肌を持つことから命名。			■					
新高 酸味が少なく、歯ごたえがある。大玉で日持ちする。						■		

おすすめは彩玉！
大きくて甘くて私もよく食べています！

